

私の故郷はマウンテン州にありますが、両親は農業を営んでいました。鉾山開発により土地を追いやされた。長年鉾山で働いていた父は体を壊し、何の保障もありません。細々と農業を再開しましたが、

Greg Las-igan
グレッグ・ラシガンさん

現在、ここもまた外国資本の鉾山開発の脅威を受けています。私たち先住民には、土地は命である。という伝えがありますが、生命そのものが脅かされる歴史が繰り返されています。鉾山開発反対運動の最中に会ったバラゴンバナナの民衆交易は、単なる反対運動ではなく、生活の基盤を作るきっかけとなりました。今は、か

つて両親が離れざるを得なかった場所に戻り、自分が農業をしておく準備をしています。若者に言い返すべきだ」ということです。しかし、仕方がないから農業を勧めるというのは容易ではありません。だからこそ、土地は命である。という共通概念が必要なので

す。常に土地が取り上げられるという脅威・恐怖がつきまとう中、土地を守る武器は、そこできちんと農業をし、生活していける農民がいること。また、食品加工にも注目しています。付加価値をつけた加工品を作って売るといいう仕事づくりをサポートしていくことが重要になると思います。

現在、ここもまた外国資本の鉾山開発の脅威を受けています。私たち先住民には、土地は命である。という伝えがありますが、生命そのものが脅かされる歴史が繰り返されています。鉾山開発反対運動の最中に会ったバラゴンバナナの民衆交易は、単なる反対運動ではなく、生活の基盤を作るきっかけとなりました。今は、か

つて両親が離れざるを得なかった場所に戻り、自分が農業をしておく準備をしています。若者に言い返すべきだ」ということです。しかし、仕方がないから農業を勧めるというのは容易ではありません。だからこそ、土地は命である。という共通概念が必要なので

す。常に土地が取り上げられるという脅威・恐怖がつきまとう中、土地を守る武器は、そこできちんと農業をし、生活していける農民がいること。また、食品加工にも注目しています。付加価値をつけた加工品を作って売るといいう仕事づくりをサポートしていくことが重要になると思います。

特集

農を軸にした地域づくり、若者が主役になろう!

第1回 APLAフォーラム in 三里塚

アジアと日本のむらをもと人と人とで結ぼうと、APLAは日本各地を持ち回りで歩くAPLAフォーラムを計画しています。その第1回を成田国際空港のお膝元の農村、三里塚で5月17日に開きました。APLA総会に引き続いて一泊とまりで開かれたフォーラムには、地域からの参加者を含め27人が参加、地域の農業や巨大空港による生活への影響など、様々なことを学びました。フォーラムにはフィリピンからアルフレッド・ボディオスさんとグレッグ・ラシガンさんも参加、地元からは三里塚に新しい農の可能性を求めて移り住み、農業にたずさわっているふたりの青年に参加いただき、地域の再生と農業をめぐって楽しい話し合いが行われました。

以下、フォーラムの報告です。あわせてフォーラムが開かれた三里塚という地で生きる青年たちの思いを相川陽一さんに、農業に生きるアジアの青年たちの活動をアジア学院の遠藤優子さんに紹介いただきました。

第1回 APLAフォーラム in 三里塚 2009.05.17

	グレッグ・ラシガン / Greg Las-igan (フィリピン・北部ルソン)
パネリスト	アルフレッド・ボディオス / Alfred Bodios (フィリピン・ネグロス島)
	岡村 三郎 / おかもと・さぶろう (千葉県成田市)
	阿南嘉起 / あなん・よしき (千葉県成田市)
コーディネーター	相川陽一 / あいかわ・よういち (一橋大学大学院社会学研究科博士課程)

Alfred Bodios
アルフレッド・ボディオスさん

ネグロス特有の問題は、植民地時代から続く砂糖産業、単一栽培があります。この中でどう私たちが変革していくかは、単なる農業技術の問題だけではなく、文化、意識の問題が大きい。砂糖労働者から農民になっていくのに非常に時間がかかります。それが現在のチャレンジです。

私たちには「バハラナ」というスタイルがあり、植えたら後はなるようになるまで、畑に手間をかけ、育むという文化がありません。ですから、農地改革で2haの土地を得ても、生産力が低く、家族が自立するには足りない。北部ルソンの先住民の土地への価値観と

モヤシから考える私たちの毎日

勝俣 誠 / かつまた・まこと
明治学院大学国際学部教授



不況になるとモヤシが売れる。日本経済新聞によると、総務省の家計調査で2人以上の世帯のモヤシ購入量は、大銀行が破綻した1998年の金融不安の実績に迫るとのこと。同記事にはなぜか分析はなかったが、少なくとも外食が少なくなり「肉食」が増えていることに関係がありそうだ。この内食傾向は外食指向の強い米国でも見られる。農務省の統計によると、2007年の食費の半分近くはファーストフードなどの外食だった。しかし、08年秋以降、グーグルの調査によると「レシピ」の検索数が急増し、料理本の売れ行きが好調とのこと。

危機のお陰で今まであったモノやコトがなくなったり、目減りしたりし、普段見えなくなっていたモノやコトを気づかせてくれる。ただこの危機の克服となるとほんどの見方は、また景気が回復して欲しいと、痛々しいまでの景気の底入れ探しをしている(それも日々裏切られてきているのだ)。

「ポコポコ」は「サンゴ礁の満潮」をイメージしています。潮が満ちていくにつれ、サンゴ礁のあちこちに「ポコ」(水たまり)が現れて、ポコポコ同士がつながり始め、いつのまにか一面海になるというイメージです。アジアの各地域で「ポコ」が生まれ、気がつけばつながっているような活動をしていきたいという思いがこめられています。

CONTENTS ■ HALINA 05 2009.08.01

02	Relay Essay ポコポコ⑤ モヤシから考える私たちの毎日◎勝俣 誠
03	【特集】農を軸にした地域づくり、若者が主役になろう! — 第1回 APLAフォーラム in 三里塚 グレッグ・ラシガン、アルフレッド・ボディオス、岡村三郎、阿南嘉起 成田有機農業の軌跡と展望 — 空港城下町で地域自立を考えていくために◎相川陽一 アジアの地域の若者たち — アジア学院インドネシア卒業生の実践◎遠藤優子
08	Topics 北の大地でしぶとく、しなやかに暮らす◎名嘉真郁子 【書評】村井吉敬著『はまが歩いた東南アジア — 島と海と森と』◎堀 芳枝 追悼・加地永都子さんを偲んで◎疋田美津子
10	堀田正彦のアジア食い倒れ◎ 韓国の「ふく鍋」◎堀田正彦
10	むらちを歩く◎ ねぎははなたれに限る◎大野和興
11	あっちこっち雑学手帖◎ 仏さまといっしょ◎松田麻衣子
11	じゃらん・じゃらんアジア◎ トリバナアゲハと生ハム◎村井吉敬
12	撮っておきアジア◎ ラオス、ボム・ビエン村◎上垣喜寛
13	APLA生活◎ マスコバド糖◎吉田友則
14	Voice from APLA partners 【パレスチナより】貧しい農民から貧しい都市住民へ、ガザ地区緊急支援報告 【フィリピンより】フィリピンからのゲスト 日本農村現場視察の報告
15	事務局便り

表紙のことば

この布はラオスの東北、サムヌア地方の80年くらい前のシン(筒型スカート)の中央部分です。コットンの平織りにシルクの色糸をプラスして、柄を立体的に見せる縫取織の技法で大きな花のモチーフを織り出しています。経(たて)糸を根気よくすくって、色とりどりの緯(よこ)糸を織り込んでいます。

この花のモチーフの柄は今でも織られていて、色はもっと鮮やかですが街中でたち働く女性たちがはいているのを見かけます。ラオスの女性たちは様々な染織の技術を駆使した手の込んだスカートを日常的に着てしまうところがすごいな、いつも思います。

首都ビエンチャンはどんどん変わってきています。街中にはジーパンにTシャツの若者も。でも、母系社会ラオスは、母から娘に受け継がれていく織物文化を簡単には手放さない気がします。

(大藪明恵)

違い、ネグロスでは土地が交換の対象です。せっかく手に入れた土地を、携帯やバイクのために切り売りしてしまう。農業を好きで選ぶ青年はほとんどいません。「学校にも行けないのでやるしかない

もの」と社会的に地位の低い職業とみなされてきました。農村の青年たちは、村を出て町で働くことを選び、仕事がなければブラブラするだけです。しかし、町に出ても、淋しさから1〜2年で帰って来る子、できちゃった結婚^①も多い。家族の絆が強いフィリピンでは、困ると親の住む地元に戻ってくるのです。農村が魅力的で食べていける地域ならば、若者たちにとってもそれ以上のことはありません。地域づくりの中で必要なことは、土地への愛情や土地を生かす農業技術を生かす子どもに伝えていくことです。その試みとして、若者たちが集い、学び、ただ経済的に食べられるだけでなく、おもしろく、そして価値観が変わるような場をつくっていききたいと思っています。



フォーラムの様子。

10代半ば、ものごとを非常にまじめに考えた時期があり、純情だった少年にとって世の中は矛盾に満ち満ちていました。自分がなぜ生まれ、どう生きていくのか、同じ人間でありながら資本家が労働者を搾取する現実、物質社会、科学技術万能という流れの中で、人間の生き方が自然の循環から離れ、地に足のつかないものになるのではないかと疑問…。そんな中、いずれば農業をやるかと考えていました。矛盾なく生きられるのは百姓なのではないかと。ただ、若いうちは色々な仕事をしてみようと思い、千葉市ですっと肉体労働を中心にやっていました。5年前、いよいよ農業の世界に入ろうと思



三里塚の畑のすぐそばには空港が。

岡本三郎さん Okamoto Saburo

労働者として働いていた時期のことを考えると、まぎれもなく都市の困民でした。そういう自分だからこそのことができるのでは、ないかと、いずれば困民と呼ばれる人との交流の中から創る「困民による困民のための農業」をやりたいと思っています。それで農業の「業」が成り立つのか疑問はありますが、そういう形から地域とのつながりもできていくのではと考えているところです。

①詳しく知りたい方は、実験村ブックレット『まちな困民・むらの困民相川陽一 地球の誰の表裏 村編』を参照ください。
問い合わせ先：地球的課題の実験村事務局
jikken-mura@mr.nifty.com

阿南嘉起さん Anan Yoshiki

ぼくは横浜市で家の裏山をかけざりまわるような少年時代を過ご

しました。親から野草のことなどを教えてもらい、摘んで家に持ち帰った野菜を料理してもらったこともあります。その反面、あきたらテレビゲーム！ という生活を繰り返していました。高校3年生の夏休みに父親から「定年後農家に戻りたい。一緒に農業をやらないか？」と言われ、その一言が後押しになりました。新規就農や研修先を探すため、『新農業者フェ



スピーカーのひとり、阿南さんの畑を見学させてもらいました。

ア』という農業専門の就職説明会のようなものに参加。最初から有機農業をやると決めていて、循環農業をやりたいだったので、鶏舎、もしくは動物を飼っているところ、研修生も受け入れているところ…と探し、三里塚ワンパックで一年間研修生として働きました。今は畑を借りて自分の農業をしています。最初は色々失敗もしましたが、2反だともまだ余力があ

ると判断し、今年から1.5反も新しく借りました。趣味としていまだにテレビゲームもやります(笑)。こんな「もやしっこ」でも農業ができます。将来的には、田んぼや鶏舎もやりたいし、数年後には父親も農業を始めるので、家族一丸となって、この地に骨をうずめる覚悟でやりたいと思っています。■

成田有機農業の軌跡と展望

—空港城下町で地域自立を考えていくために—

相川陽一 / あいかわ・よういち
一橋大学大学院社会学研究科博士課程

成田有機農業の軌跡

成田空港周辺で有機農業が始まったのは1970年代の初期に遡る。空港建設をめぐる住民・支援者と空港公団・警官隊との間で激しい武力衝突が繰り返して発生していた頃である。有機農業を導入したのは、長年にわたって空港反対運動に取り組んできた農民と、都市部から現地に住み込んで支援活

動に取り組んできた青年たちだった。長期闘争に耐えうる農業のあり方を摸索する中で、化学肥料を使わずに堆肥をつくる活動が72年に開始された。しかし、慣行農法から農業も化学肥料も使わない有機農業に転換したばかりの時期には、病虫害や不作が付きものだ。これを支えたのが、空港反対運動を支援していたさまざまなグループ・個人だった。安全な食べも

のを求めて農家と直接むすびついていこうとした共同購入団体もあった。70年代に各地で立ち上がった生協には学生運動の経験者が流れ込み、成田での農民支援の経験をもつ若者が、事業を通じて三里塚との関係を結びなおしていった。出発当初の成田有機農業の特徴は二点ある。第一に生産も流通も消費も空港反対運動を担う人びとによって担われたこと、第二に消費者主導ではなく生産者主導で開始されたことだ。やがて空港反対運動とは別に有機農業を始める農家も現れ、成田空港周辺地域は、いまや有機農業の先進地帯となっている。

成田に吹き始めた新風：

農業への新規参入者の登場と定着

90年代末には、この地域の有機農業に静かな変化が起きていた。新たな農業の担い手の登場である。農家に憧れ、農業で生計を立てることを目的にして、都市部から移り住んでくる若者が年々増えている。ここで強調しておきたいのは、彼らは空港反対運動とはまったく異なる動機で、つまりは農業に携わることを目的に、この地に根を張ろうとしているという点だ。

私はこの地域に数ある有機農業のグループの中でも、『農事組合法人三里塚ワンパック野菜』以下

ワンバックと『東峰べじたぶるん』に生産者／研究者として関わりをもってきた。

ワンバックは76年に結成された無農薬野菜の生産出荷グループで、結成期の生産者はみな空港反対運動の担い手だったが、90年代に離農や独立が相次ぎ、90年代後半には結成当初からのメンバーは一軒となっていた。その頃から、研修生やアルバイトとしてワンバックで農業経験を積む若者が増えてきた。成田で出会った新規参入者同

士で結婚したり、子供が生まれたり、周囲はにぎやかになってきた。近年は「ワンバックのこれから」がテーマとなり、ベテラン農家と新規参入者の間で話し合いがじつくりと積み重ねられてきた。そして09年春からは、新規参入者が生産や出荷を主体的に担っていく体制に移行した。新規参入者は、研修を終えた後に農地を借りて独立しており、農業経営の安定化を図っていく時期にさしかかっている。

2006年に結成された東峰べじたぶるんの特徴は、現在10名いるメンバーのほとんどが1ターンの新規参入者という点にある。夫婦やチームで生産単位をもち、週に一度の無農薬野菜の宅配をメイン事業に据えている。もうひとつの特徴は、都市との距離の近さにある。大都市に近いだけでなく、メンバーは出身地や就学地にあたる東京に様々なネットワークをもち、直売やトークイベントなど毎月都市に



東峰べじたぶるんのメンバーたち。

出かけている。べじたぶるんの事業規模は少しずつ拡大しており、かつての新規参入者たちは、研修生やアルバイトとして「学ぶ」段階から、一人前の農家として「稼ぐ」段階へと移行しつつある。

先述のワンバックにみられた世代継承の動きを、私は「反空港運動から就農インキュベーション」という流れで捉えている。この地域の有機農業が空港反対運動から始まったことは動かしがたい事実だ。しかし、私が10年にわたる現地経験から見出したのは、こうした出発点をもつ成田の有機農業が、「農業で生きていきたい」という目標をもつ若者たちの独立をサポートする農業団体へと変化



直売イベントの様子。

しつつある兆しがあった。

農業を基盤に据えた地域自立へ

空港による正負の影響の双方を抱きながら進んでいかざるを得ない地域で、魅力ある有機農業が30年にわたって続けられ、そこに若者が集う。空港反対運動が展開されてきた地域が、農に関わる様々な人びとが行きかう場になりつつある。この地に蓄えられてきた農の営みや自然の豊かさに魅了される若者たちの存在は、この地で農業を続けてきた人びとに、自分たちの生業や、守り育ててきた地域社会への誇りを再確認させていくことだろう。

この動きを、農業を基盤に据えた地域自立、空港に過度に依存しない地域づくりを摸索する動きへつなげていくことが、今後の安定した地域経営を達成していくうえでも必要なことではないだろうか。そのためには、30年にわたる有機農業実践から生まれた農民発の新規就農サポート体制に行政が学び、農業を志す地域内外の若者たちが農業で食べていける地域社会を創り出していくことが、今後求められていくだろう。

アジアの地域の若者たち — アジア学院インドネシア卒業生の実践

遠藤優子 / えんどう・ゆうこ
アジア学院職員 広報・販売担当

栃木県那須塩原市のアジア学院で農業研修を終えた卒業生たちが、地域に戻り活躍していると聞きました。アジアの若者たちの実践をご紹介します。



子ヤギを配布した農家を実際に訪問し、ウェズリー(中央)がプロジェクトについて説明をしているところ。

クタイよりも、ジーンズで農民たちと一緒に働くことを選んだんだ。」

有機農業モデル村を目指して

有機農業研修センターを運営する RDA (Rural Development Action) の代表ウエズリー(93年卒)は卒業生の中でも代表的な存在。地道に継続してきた家畜・苗木配布プロジェクトが実を結び、今までに6000本の苗木と、1200頭の子ヤギ、240頭の子豚を147世帯の村中で110世帯に配布することに成功。

配布用苗木にマホガニーが加えられているのは硬い材質が家具作りに適しているから。「この木を使って10年後に村で家具会社を立ち上げたい」と思っている。しかし木は有機農業にとって重要だから簡単に切ってはいけない。一本切ったら5本は植えると農民には「口すっぱく強調している。この木が10年先には若者たちのための素晴らしい資源となり、都会に出て行かなくて済むよう村内で雇用を生むことが出来る。だから10年先を考えて今、木を植えるんだ。」

村人たちの自立を目指すウエズリーは RDA でも経済的自立を実践。彼を除く専従スタッフの給与は全て農場からとれた農産物の売り上げだけでまかなわれている。「農場職員の給与が確

保されているから農民たちのトレーニングをどんなに低価格で行ったとしても問題はない。自分の給与だけ自分で稼いでくればいい。様々な NGO を見て思ったが、助成金に頼った運営では持続性もないし、農業で自立を目指す農民に対して説得力がないからね。」

村長でもある彼の夢は、村を有機農業のモデル村とすることだ。「家畜配布プロジェクトのおかげでほぼ全家庭に家畜がいる状態となった。家畜の糞尿を利用した堆肥が基盤となって、この村に有機農業が普及していくと思う。」

「将来は県レベルからのアプローチも必要。ここダイリ県で行政主導の有機農業プログラムが始まって、来年プロジェクトの一つを僕が担当することになった。この有機農業運動にアジア学院の卒業生たちが様々な形で参加し始めている。これからは本当に楽しみだよ。」

【アジア学院とは】

アジア・アフリカなどの農村地域の民間開発団体 NGO から、その土地に根を張り、人びとと共に働く「草の根」の農村開発従事者を学生として招き、自国の「コミュニティー」の自立を共に目指す指導者を養成することを目的に1973年に設立。9ヶ月間にわたる研修では、栃木県那須塩原市のキャンパスに学生職員、ボランティアが共に生活し、共に汗をながら、有機農業を基礎として食料自給を目指し、価値観等それぞれの違いを尊重し、公正で平和な社会実現のために、実践的な学びを行っている。

ジーンズ姿を選んだ牧師

ティゴ牧師(03年卒)が帰国後直面した問題は、彼が働く教会の幹部から有機農業に関する理解を得られなかったことだ。「こんなものが役に立つのか」と取り合ってもらえなかった。しかたなく自分に協力してくれる農民一人と一緒に自分が学院で学んだことに挑戦し始めた。そして、その実践を教会のニュースレターに毎回記事として根気強く書き続けた。教会のプロジェクトとして認められるのに1年以上かかったよ。」

会だけではなく、別の教会グループや NGO、政府まで興味を示し、彼は有機農業トレーナーとして大忙しだ。「学院の研修を通して、牧師としての変なプライドを捨てることで昔は重い荷物を持たなかったし、農場で働くこともなかった。周囲は驚いているが、今は何でも自分でするようになったよ。インドネシアの牧師は偉そうだから、手を土で汚すようなことはいらない。いつもスーツとネクタイで、こんなジーンズなんて絶対に履いたりしないよ。僕は帰国してからずっとこんな格好だけだね。」とれだけ天国の話にしても、農民たちが空腹では説得力がない。だから、僕はスーツとネ

北の大地でしぶとく、 しなやかに暮らす

名嘉真郁子／なまきま・いくこ
旅人宿「なまかまの家」経営、シャブラニール道東連絡会

私

私たちは今からちょうど25年前、家族（主婦と子ども二人）で関東圏から北海道に移住し、その4年後から東部の標茶町に素敵な（？）廃屋を見つけ、暮らしている。シベチャとは、アイヌ語で「大きな川のほとり」というだけあり、釧路川の大きな流れが釧路湿原へと続く分岐点にある町で、基幹産業は酪農である。人口は、移住当初は1万1000人だったものの、現在は8500人で、近隣の町村と同じく減り続けている。人口に対して牛の頭数はおよそ5倍の4万頭余りだが、農家の戸数は400戸ほどなので、一戸あたり平均100頭飼育していることになる。

北海道・酪農の現状

北海道の酪農地帯といえば、青々とした牧草地がどこまでも広がり、牛たちがのんびりと草を食む、そんな光景を思い浮かべることと思うが、酪農を営む人びとの生活はその光景とは裏腹

に、大変厳しいものがある。親や祖父の代に開拓で入ってから順調に規模も増やしてきたが、当然施設も拡張することとなり、大型機械も導入した末、莫大な借金を抱えている、というのが大半の酪農家の現状である。実際この20年で、後継者不足や負債のため経営が行き詰まり、離農していった酪農家が、この規模の町で200戸もあるのである。

五十石で暮らす

私たちが住みついた駅前（釧路網走・五十石駅）の地域も、今から45年前まで学校を中心に集落があったほどなのに、20年前の移住時も今も、家は4軒で人口はわずか12人である。見つけた廃屋も離農跡地で10年間も放置されていたものだが、水は自噴しており、裏には山菜やキノコの採れる雑木林が広がり、敷地内



「なまかまの家」にて。郁子さんとお連れ合いと愛犬ポギー。

た。

価値観をつなぐ

20年前も今も、夫と私はここで「身の丈にあった暮らし」「ほどほどの暮らし」、もっと言えば「環境に負荷をかけない暮らし」「金を稼がず、使わない暮らし」をめざしている。しかし、これは現代の日本ではなかなか理解されない生き方らしく、いつ家を建て直すのか、宿はどこまで大きくするのか、土地はどこまで広げるのか、と心配げに質問されるのがこれまでの常だった。もちろんそんな気はない、と答えたところでもわかってもらえないので、「お金があったらねー」とお茶を濁してきた。ところが、世の中の景気が落ち込み（？）同年代の友人がリストラや失業の憂き目に遇う時代になると、いつの間にか質問してくる人はいなくなった。逆にうらやましがられることが増えてきた気さえする。

直接の子育ては終わったものの、まだ引退には早すぎる今、私たちのこうした暮らし、価値観を次世代の若い人びとに伝えていけたらなあ、と心から思っている。押しつけではなく、共有する形で。そもそも私が20代にこの価値観の礎をフィリピンで人びとの暮らしの中から学んだように、である。■

書評

村井吉敬著

『ぼくが歩いた東南アジア―島と海と森と』

堀芳枝／ほり・よしえ

東京女子大学 人間社会学部 国際社会学科 准教授



コモンズ、2009年、3,150円

この本は『エビと日本人』徹底検証日本のODAなどの著書で知られる村井吉敬が、インドネシアを中心に33年間にわたって東南アジアを撮影した写真と、背景や思いをつづったフォトエッセイである。

彼の多くの著作の中で、私はインドネシア留学時代についてつづられた『スンダ生活誌』が一番好きだ。そこにはインドネシアの庶民に対する暖かいまなざしと彼の「情」の深さを感じられるからだ。また、筆者がインドネシアの日常生活に入り込み、庶民の視点からインドネシア社会を捉えようとしている姿勢も伺える。フィリピン留学前にこの本を読み、自分も「かくありたい」と思ったことを覚えている。

その後、筆者は庶民の暮らしの先にあるスハルト権威主義体制や日本のODAを研究し、批判していった。この間の著作には、『スンダ生活誌』とは異なり、国家権力との中途半端な妥協を許さない「強さ」を垣間見ることがで

きる。どうしてあんなに怒ることができのさだろう、と思ったこともあった。でも、今はわかる。それは彼の問題意識の根底に、いつもインドネシアで出会った人びとの思いがあるからである。また、彼は人びとの暮らしをよくするために具体的に行動する人でもある。エコシュリンプを（株）オルター・トレード・ジャパン（ATJ）と協力して日本に持ってきたり、津波で被害を受けたアチェの人びとに魚を捕る網を持っていったり…。

この『ぼくが歩いた東南アジア』は筆者が歩んできた33年間の軌跡を、1970～80年代の東南アジアの庶民の様子を思い出しながら、あるいは今日の状況と比較しながら追うことができる。筆者について知りたい人には是非読んでもらいたい。

最後に、全カラー写真で3150円という値段は、日本の庶民の懐にも良心的であることが、この本をいっそう良書としている点を協調しておく。■

追悼・加地永都子さんを偲んで

疋田美津子／ひきた・みづこ
APLA共同代表、しらたかノラの会

4月13日、日本ネグロス・キャンペーン委員会（JCNC）の常任運営委員として、また、APLAの評議員として本誌『ハリーナ』の編集にも長年携わった加地永都子さんが「うつ血性心不全」で急逝された。享年69歳。翻訳家として数々の本を世に出したが、ノーベル文学賞を受賞したドリス・レスリングの『アフガニスタンの風』や、ダグラス・ラミスの著書の翻訳などで知られる。1968～69年にYWCA会員として米国留学し、公民権運動やフェミニスト運動に触れた後帰国し『ベトナムに平和を！市民連合』に参加。英文AMPPO誌で知られるアジア太平洋資料センター（PARC）の中心メンバーとして世界各地の民衆運動の現実を日本に紹介した。



加地永都子さん

82年にPARCの事務所での出会って以来、JCNCからAPLAに至るまで30年近い付き合いだったが、加地さんは常に私にとって指南役であり、導き手だった。雑誌の編集や翻訳という具体的仕事においてだけでなく、世界に目を開き、怒り、行動することにおいて。PARCの季刊誌『世界から』の加地編集長の下で、フィリピンや韓国の独裁体制下の抵抗運動のルポの編集や、南米の民衆神学者のインタビュー、チョムスキーの論文の翻訳など、ハードな仕事にめげそうな私をいつも叱咤激励してくれた。「知ってしまった者の責任っていろいろがあるでしょ、ヒキちゃん」。

JCNCからAPLAへと進む時期には、特に農と食の分野で国境を越えて人と人がつながる活動を支えた。グルメで料理好きな彼女は、山形で農業をはじめた私が仲間と毎月送った野菜ボックスをいつも楽しみにしてくれた。「ズッキーニは黄色のがいい」と言っていたから今年は何本も植えておいたのに、届ける人がいなくなってしまう。

03

あっちこっち 雑学手帖 05

松田麻衣子 / まつだ・まいこ
APLA事務局



ワット・シェンクアンのお仏たち。イラスト：上原祥子

仏ちまきとついで
ラオスにワット・シェンクアン(Wat Xeng Kuang)という庭園がある。ワット寺といえど今や寺院の機能を果たしていないそこはブッダパークとも呼ばれ、ちよっとした観光スポットになっている。青空とやわらかな日差しの下、さわやかな風が緑を揺らし小鳥が飛び交う中に、静かな微笑みをたたえた仏像がそこかしこに：なんて光景はない。複雑な内部構造を持つ怪物としか言いようのないドームや不可解かつ奇っ怪な世界群など、そこにあるのは珍奇な世界だ。拝んでいいのかひれ伏せばいいのか、向き合い方にまいち自信が持てない。

はっと見、マッドパークなブッダパークは置いておいて、ラオスやタイなどの仏教国では、仏教が実に自
然なほど日常生活に浸透している。個人的に極めつけはこれだなど思っただのが曜日毎の守護仏と色だ。こちらの人であれば、誰でも自分の生まれた曜日を知っている(ちなみに日曜生まれの私の守護仏は、瞬きせずに菩提樹を見つめている立像で、曜日の色は赤。タイでは賽銭が6バーツと一番安い)。タイにおいてタクシン派と市民連合(反タクシン派)がにらみ合っている時、赤vs黄色だったのにも実はこれが関係している。赤はタイ国家を表す色だが(タクシン自身は火曜生まれなのでピンク)、黄色は月曜生まれの国王の色。元々タイでは、国王の長寿などを祈念し月曜に黄色の服を着る人が多い。日曜生まれで普段から赤を身につける人もいたんだろう。ところが対立が激化すると、どちらにも与しない一般市民は赤や黄色の着用を控えるようになり、憎いアイツの色なんか身につけてられるかと双方勢力も互いの色を避けあつた。
ともあれ、曜日以外のブッダパークの仏像？たちには真つさらな気持ちで向かってみるとして、仏教国に行く時は自分の誕生日をチェックしておくことをオススメする。転ばぬ先の杖ではないが、拝すべき仏様を間違えずに済むし、話の取っ掛かりにも使えるから。

01



堀田正彦の アジア食い倒れ 05

堀田正彦 / ほった・まさひこ
(株)オルター・トレード・ジャパン代表取締役



イラスト：保光美由紀

韓国の「ぶぐ鍋」

一週間の韓国農村滞在で、私は「キムチ酔い」にかかってしまった。農村の食堂は民家である。庭先から何もない座敷に上がりこむ。そこへ、食堂の女性たちが二人がかりでテーブルを運んでくる。テーブルの上にはすでに数十種類のキムチの皿とてんぶら、卵焼き、肉団子の小皿がびっしりと並んでいる。「さあ、さあ、まずは食べましょう！」という声を聞いて、金属の容器に入ったご飯のふたを開け食事となる。
白菜、チョンガー大根、え胡麻葉、桔梗の根、もやしのキムチ、キノコ、蟹テジャン、小魚の煮付け、水キムチ、そして朝はみそ汁、昼は牛骨スープ、夜はアサリのスープ。つまり、日替わりするのはスープだけで、他は毎日同じメニューなのである。これは疲れる。
帰国の前日、「韓定食だけは勘弁してもらいたい」と私は懇願した。「じゃ、ぶぐ鍋にしましょう！」といううれいし答えが返ってきた。「ぶぐ鍋屋」に入った。小座敷にあがるがガスコンロのついたテーブルがある。始めに水の入った大鍋をコンロに載せ点火する。アジユマ(お店のおばさん)がザルに山盛りにした青菜を運んできた。「これは何だ？」と聞くと、「セリのぶつ切りです」とのこと。次に出てきたのが大きめの皿に並んだ、カワハギの干物のようなものである。恐る恐る「カワハギですか？」と聞いてみた。「ぶぐです。」と断固とした答えが返ってきた。「あー、ぶぐ鍋のぶぐは干物なんだあ」と、私は一人合点した。次に運ばれてきたのはやはりザルいっぱいのにきれいに皮を剥いたニンニクである。そのニンニクとぶぐの煮物が鍋に投げ込まれ、十分なダシが出たところで、山盛りのセリを鍋に浸し、くたつとなったところをつまみあげて、コチュジャンのたれにつけていただくのである。ニンニクのダシはコクがあつてうまかつた。ただ、「ぶぐ鍋というよりはセリ鍋」と言っただけでなく、私はセリ鍋と私の感想である。

京都市の町なかの一軒の家の軒先にその店はあつた。上京区の野菜農家佐伯昌和さんの直売店だ。ちよこちよこという感じで自分のつくった野菜が台の上に並んでいる。佐伯さんは伝統野菜の代表ともいえる京野菜を作り続けている農民だ。
いまでは都市化された上京区だが、かつては野菜地帯で畑が多かつた。佐伯さんはそこで今も60アールの畑を耕す野菜専門農家だ。できるだけ自然の恵みに基づく農業をしようと、ハウス栽培はやっていない。化学肥料は使わず、8年ほど前から農薬もやめた。都市農業の利点を生かして、生産したものの8割は自宅の前の直売所で売っている。
佐伯さんは九条ねぎ、壬生菜、水菜、伏見とうがらし、鹿ヶ谷かぼちゃ、万願寺、堀川ごぼう、賀茂なすなどなど、自身で種取りもしながら京都の生活に根付いた伝統野菜を主に手がけている。
伝統野菜は手間隙がかかる。例えば九条ねぎ。9月下旬に種をまき、翌年3月に定植、8月に抜き取って干し、先をちょん切つてまた植える。収穫は10月末から翌年3月まで。収穫まで1年半かかる。
佐伯さんは作るだけでなく、食べることにもうるさい。九条ねぎは別

04

じゃらん じゃらん アジア 05

村井吉敬 / むらい・よしりのり
早稲田大学教授、APLA共同代表

トリバナアゲハと生ハム

ワニヤシガメが歩いて「保護」されたり、アジアアロワナが密かに売られたり、日本は絶滅危惧種が平然と出回るクニだ。東南アジアでも日本人目当てのたくさんの密売業者がいる。かつて、私のところに、あやしげなインドネシア人が剥製前のゴクラクチョウ数十羽を売りに来たことがあつた。あのとき買って高値転売しておけば一時成金になれたかもしれない。
さて、蝶収集家なら誰もが捕つて(見て)みたいのがトリバナアゲハである。東部インドネシアからパプア・ニューギニア近辺に生息する絢爛豪華な蝶である。トリバナアゲハ類には4属、6亜属、29種、118亜種があるとされている。黒地に金属光沢の緑色や青、朱などが映える。雌は大型だがずっと地味である。このトリバナアゲハも実は御禁制品取引が禁止されている。いまは大量に人工飼育標本が出回っている。
私はかつて蝶を収集するという悪癖があつた。今はタバコと共にやめてしまつている。博物学者・進化論発見者として名高い英人アルフレド・ウォレスは、インドネシアのパプア島でトリバナアゲハを初めて捕つたとき(1858年)「その華麗な翅を揚げんとした瞬間、私の心臓は



トリバナアゲハが舞い来る珊瑚礁の浜辺(パプアのファクファク) (上)



メガネトリバナアゲハの雄(右)

激しく鼓動し、血が頭にカッとのぼり、ほとんど失神せんばかりか、このまま死んでしまうのではないかとさえ思った」と記している。
私が初めてメガネトリバナアゲハを捕つたときにもさすがに手がふるえた。1988年8月28日、アラフラ海の小さな島でのことである。その後、実は見飽きるほどメガネトリバナアゲハに出会っている。場所によってはワシントン条約で取引禁止にするのはおかしいと思うほどの普通種である。パプア・ニューギニアのドイツ人神父の館の前庭にはこの蝶がアゲハチョウほどたくさん飛んで来ていた。それよりも、ドイツ人神父が本国から取り寄せて食べていた生ハムの方が珍しかった。ご相伴に預かり美味しかった。
(注)『マレー諸島・オーストラリア・ニュージーランドの蝶類』(上下)新嘉坡天賦、ちくま学芸文庫、2003年

02

むらを歩く ⑤

大野和興 / おおの・かずおき
農業ジャーナリスト、本誌編集長

ねぎははなたれに限る

名はなたれねぎとも言い、切るとトロッとしたものが出てくる。これがおいしい。
九条ねぎには太ねぎと細ねぎの二つがある。太ねぎのほうがこのトロッが多くおいしいのだが、いま市場に出回っている九条ねぎはほとんどが細ねぎである。
ねぎの市場規格は1束200g。ところが太ねぎは1本で300gはある。規格をはみ出してしまふというところで、市場が取り扱わないのである。佐伯さんは直売が中心だから、おいしい太ねぎを作ることができる。「それにしても」佐伯さんは言う。「京都の人もこのごろ、すき焼きは関東の白ねぎになってしまった。昔は九条の太ねぎだったのだが」せつかく京都に住んでいるのに、と残念そうだ。



自宅前の直売店。

今回のお題

マスコバド糖

レポーター
吉田友則 / よしだ・ともり
『きまぐれや』シェフ、出張料理人



「もしもし。あれは、何よ？ 凄いで初めてその生徒さんが、(株)オルタ

「もしまし。あれは、何よ？ 凄いで初めてその生徒さんが、(株)オルタ

「もしまし。あれは、何よ？ 凄いで初めてその生徒さんが、(株)オルタ

「れよかつたら使ってみてくださ。プロのシェフが使えるかわかりませんが、これが僕とマスコバド糖との出会いでした。

「うん？ なんだろ？ 黒砂糖の種類かな？」と思いつつ受け取ったのが、生徒さんから渡されたのが

「袋を開けて広かった世界」

「変わったコト、変わらないコト」

《『きまぐれや』さんのHP》 <http://www.kimagureya.org/>
シェフがご自宅に料理してくれます。



- 1 — もともと森林地帯だった1.4 haの土地には、600本のゴムの木が植えられている。中国資本企業との契約農地として切り拓かれ、3世帯11人の親族で管理している。
- 2 — ゴムの収穫期は毎年4～11月の8ヶ月で、木に傷を付けて樹液を集める。作業は傷口にペースト状の殺虫剤(化学性)を塗ることぐらいで、施肥の必要性もない。
- 3 — バイ(24歳)が16歳の時にゴムの苗木を植え始めた。近隣の村々では自給自足の生活を基本的に送っているが、バイの家族は今ではゴムの他に何も作っておらず、生活に必要なものはすべて現金で買っている。ゴムを植え始めて車も買った。
- 4 — 生あたたかく甘いにおいが残るゴムの塊。毎月約1,000kgの収穫量がある。生活費となるゴムの出荷額は昨年はじめに1kgあたり8元(約120円)だったが、年末には半値以下にまで落ち込んだ。相場は調べてなく「今年いくらになるかはわからない」という。

(2009年4月撮影)

このコーナーでは皆様の写真を募集しています。

募集内容◎アジアを旅した写真5枚程度(日本も含まず) 詳しくはAPLA/あぶら事務局(Tel:03-5273-8160)までお問い合わせください。皆様からの応募をお待ちしております！

【事務局だより】

編集後記

三里塚で開催したAPLAフォーラム、私自身は訊ねる側であると同時に迎える側でもあった。農民の土地闘争として、60年代から80年代にかけ、三里塚の名は世界に轟いていた。今その三里塚に、闘争後の世界しか知らない若い世代が農を求めて集っている。三里塚にかかわって40年、この三里塚を九ご次の世代にどう伝えるか、フォーラムはそんな老世代にもとても面白く興味ある空間をつくってくれた。(大野)

JCNC時代に発行していた『ハリーナ』103号より、私の編集の仕事が始まりました。右も左も分からない私に、編集の基本的な部分を教えてくださったのが加地永都子さんでした。JCNC、そしてAPLAに変わっても加地さんの視点は、この機関紙の中に息づいています。加地さんのそれには到底及びませんが、でも、加地さんを思い出すことで、失ってはいけない世の中への視点があることを、今後も気付かされるような気がしています。(吉澤)

APLAはよくよくおいしいものと巡り会う機会の多いところである。ノラの会に三里塚のお野菜、某店のパンだとかみかんもそう。グルメやグルマンディーズでもなければむしる疎い私だが、食べているとうれしくなるものばかりだ。食材それ一つを取り巻くひとやストーリーがおいしいものたらしめているのかなあなんて一丁前に言ってみたりして。(松田)

ハリーナ HALINA

2009年夏号 vol.02-no.05
2009年8月1日発行

編集長
大野和興

編集者
吉澤真満子、松田麻衣子

表紙写真
長倉徳生

デザイン・制作
十年舎

編集・発行
特定非営利活動法人APLA
(APLA/あぷら: Alternative Peoples' Linkage in Asia)

〒169-0072
東京都新宿区大久保2-4-15
サンライズ新宿3F
tel. 03-5273-8160
fax. 03-5273-8667
e-mail info@apla.jp
URL http://www.apla.jp

印刷
株式会社セイズ

APLA web siteでは、本誌に掲載されている写真の一部をカラーでご覧いただけます。
http://www.apla.jp/04/04_halina.html

事務局の動き(2009年5月～7月)		
5月 9日	ATJと一緒に『世界フェアトレード・デー』のイベントに松田が参加しました。	
5月 12日	WE21みなみにて、大橋が講演会を行いました。	
5月 13日	恵泉女学園大学にて、大橋が授業を行いました。	
5月 16日	第二回総会開催	
5月 16日、17日	APLAフォーラム第1回@千葉県成田市(三里塚)開催	
5月 18日～20日	フィリピンゲストのアルフレッド・ボディオス氏、グレッグ・ラシガン氏、山形県米沢郷牧場、山梨県白州郷牧場、黒富士農場を視察し、BMW技術の適応方法を学びました。	
6月 6日	フォーラム・アソシエの総会に野川が参加しました。	
6月 12日	東京平和映画祭にて、『オリーブの木がある限り』の上映に合わせて、パレスチナ産オリーブオイルを販売しました。	
6月 13日	日本平和学会にて、APLAの商品販売を行いました。	
6月 17日～20日	ネグロスにて大橋、吉澤がATCと打ち合わせを行い、カネシゲファームの契約に関して話をしてきました。合わせてNBAの会議にも参加しました。	
6月 26日	和光大学によるネグロス短期留学プログラム参加者へネグロスについてのオリエンテーションを吉澤が行いました。	
7月 7日～11日	北部ルソンにて、BMWプラントの設置作業を行いました。	
7月 8日、9日	生活協同組合連合会きざりにて、ATJと一緒に学習会を吉澤が行いました。	
7月 11日	APLA1日カレーカフェ開店	
7月 25日～ 8月 1日	APLA会員・グリーンコープ共同の青少年ネグロス体験ツアーを行い、大橋、吉澤が同行しました。	

事務局からお知らせ

パレスチナ緊急救援・フードバスケット支援へのご協力ありがとうございました。
2009年1月から始めていたパレスチナ・ガザ地区への緊急支援は4月23日を以って終了しました。たくさんのご支援ありがとうございました。これだけたくさんの方々が日本から集まったことに現地のスタッフたちも驚いていました。また、この支援により、日々戦っているガザ地区の人びとをはじめ、パレスチナのみなさんへ、日本からの気持ちが伝わったものと思います。(詳細は14ページ)

【募金報告】	
募金総額	14,242,065円
現地への送金①(1月15日)	2,500,000円
現地への送金②(3月3日)	4,500,000円
現地への送金③(4月24日)	7,242,065円

APLAでは会員さんへメールマガジンを配信しています。
APLA会員限定のメールマガジンを不定期に流しています。まだ登録されていない方はぜひ登録してください。(事務局までご連絡下さい。info@apla.jp)

From Palestine (パレスチナより)

貧しい農民から貧しい都市住民へ
ガザ地区緊急支援報告

イスラエル軍による2008年末から3週間にわたるガザ地区侵攻は、死者1300人(子ども410人を含む)、負傷者5015人という多大な犠牲を出しました。オリーブオイルの出荷団体であるPARC、UAWCからのアピールを受けたAPLAとATJは基本的な食料を被災者に届



フードバスケットを受け取る被災者。

ける『フード・バスケット』活動への募金を呼びかけ、総額1424万円余りの募金が寄せられました。PARC、UAWCはこれまでの送金分700万円を活用し、2月と4月、計1145セットもの『フード・バスケット』を被災者家族に配布しています。2月の配布物資はヨルダン川西岸地区で調達し、UNRWA(国連パレスチナ難民救済事業機関)のトラックでガザ地区にある複数の配布センターまで運搬しました。しかし、イスラエル政府がガザ境界で搬入物資に厳しい制限を加えているため、手続きに非常に時間がかかりました。空爆及び地上戦により、ガザとイスラエル境界付近に広がるオリーブ、柑橘類の畑は更地にされ、農地全体の30%が破壊されました。鶏舎、野

From Philippines (フィリピンより)

フィリピンからのゲスト
日本農村現場視察の報告

2008年5月に行われたAPLAの総会にゲストとして来日したネグロス島のフレッドさん、北部ルソンのグレッグさん、千葉県成田市でのAPLAフォーラム参加後、山形県・米沢郷牧場、山梨県・白州郷牧場及び黒富士農場を訪問し、BMW(パクテリア・ミネラル・ウォーター)技術を用いた生産現場を視察しました。二人は滞在中、日本の農業技術の高さや作物の生産性を高めるために、様々な工夫や経験が蓄積されていることに驚いていました。現場でやりたいことが具体的に見えている二人だからこそ、とても真剣に熱意を持って、たくさんの方々と話をしています。

た。そのまま日本で行われていることをフィリピンで適応することはできませんが、色々なアイディアや考え方を学んだ視察となりました。フィリピンに戻った二人はさっそくそれぞれの現場で動き始めています。ネグロス島のフレッドさんは、農民たちとの話し合いを更に進め、農民学校、若者が学ぶための実習農場の準備を進めています。北部ルソンのグレッグさんは、BMWを作るための設備の建設を始め、有機堆肥をつくり、地域の農民たちへ配布することを考えています。日本で見聞きしたことが、それぞれの現場で生か



視察中、熱心に話を聞くフレッドさん(右端)とグレッグさん(右から二番目)。

されていくことになるでしょう。それぞれの進捗報告は追ってお伝えしていきたいと思っています。(APLA事務局長・吉澤真満子) ■
(注)パクテリア(微生物)・ミネラル(造岩鉱物)・ウォーター(水)の略。パクテリアとミネラルの働きをうまく利用し、土と水が生成される生態系のシステムを人工的に再現する技術のこと。

計支援のため、4月以降は穀物、野菜、調味料、加工食品をガザ地区内で調達し配布することにしました。この活動は「貧しい農民から貧しい都市住民へ」と名付けられました。残りの資金についても『フードバスケット』配布を継続する予定です。(ATJ広報室・小林和夫) ■

市住民へ」と名付けられました。残りの資金についても『フードバスケット』配布を継続する予定です。(ATJ広報室・小林和夫) ■